異郷より。

TKミハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異郷より。

【Ｎコード】
Ｎ８０３４Ｘ

【作者名】
ＴＫミハル

【あらすじ】
勘当同然で家を飛び出し、流れの冒険者となったシャーロットに、ある日妹からの伝言が届いていた。曰く、こちらには帰りにくいかも知れないけれど、せめて手紙だけでも送ってほしい。また、半年以上連絡が途絶えた場合には、ギルドに捜索願を出そうとも考えている、と。……これは、そんな筆不精な姉シャーロットの冒険譚である。

序章～妹への手紙～（前書き）

Ｒ１５と残酷描写アリは保険です。

序章～妹への手紙～

親愛なるエリーへ

私は今、北の町グレンタールへ来ています。

前の手紙から二ヶ月ほど経ったけれど、そちらは変わりはないですか。

ここは春の時期になったばかりだというのに雪、雪、雪で、退屈しの

ぎには編み物や刺繍をするか書き物をするかぐらいしかないです。

編み物や刺繍をするよりはと、こうしてペンを取りました。

今回の手紙が早いのはそうした理由なのです。だから体調不良などでは

ありません。

たまに早めに手紙を送ると、シャロン調子でも悪いんじゃない、と毛皮

のコートや栄養のつく食べ物を指定のギルドに送るのはいいのだけれど

食べ物に関しては生ものだけは避けてください。

前にエリーが釣った魚を箱詰めにして送ってきてくれたことがありまし

たが、せめて干物にして欲しかったです。

預けられた日から一ヶ月は経っていたので、地下の涼しい場所に保管し

てあったとはいえ、蓋を開けるのには勇気がいりました。

それと、ドレスや装飾品を送るのもやめてください。

冒険者をやっている私には必要ないものです。

これまで送られてきたものは、ほぼ換金しましたが、たまに手紙でちゃんと使ってる？などと尋ねられ、その度心が痛みます。

次にギルドに預けるのは、実用品や保存食でお願いします。

それでは、けがや病気に気をつけて。

姉、シャーロット

追伸

手紙を書いてから三日、やっと吹雪がやんで空が晴れました！

ずっと宿の部屋にこもりきりだったせいか、上の文章が陰気なものになってしまいました……。しかし、これからは違います。

地元の人に訊いたところによると、この町の近くにそびえるキリジュ山にはとても見晴らしのいい高台があるとのこと。

こんな晴れはあまり長い期間続かないとも話していたので、明日にでも登る予定です。みやげ話を楽しみにしていてください。

序章～妹への手紙～（後書き）

ここには基本的に補足などを載せる予定です。

エレナ→愛称エリー　シャーロット→シャロン　です。

雪山にて

地元民によれば、山の高台まで一本道で、天気が良ければ迷うことはないとのこと。

ふもとの町や、名所である『地獄口』の大穴が一望できる見晴らしの素晴らしさはもう語り尽くせない、と身振り手振りを加え説明してくれた宿の主人。

彼は天候の変化や山の名所に詳しい案内人を是非と勧めてくれたが、今に至ってそれは、商売っ気を出したのではなく親切心からだったとはっきり自覚した。

疑ってすまない、と心の中でその主人に詫びる。

シャロンは現在、前も後ろもまったく不明な吹雪の中を一人さまよっていた。

晴れていたのは本当につかのまで、しばらく登っていくと徐々に雲が出始め、まだいいかなと思っているうちにすぐに視界は雪と風に閉ざされ、見晴らしのいい高台どころか帰り道すらわからない状態である。

……どうして、こうなった。

歩いても歩いても、吹雪はやむ気配すら見せず、ひたすらまわりをびゅうびゅうと取り巻いている。

シャロンはかろうじてわかる地と空の薄暗い境界線に向かって必死に足を進めていた。
もはや体の感覚は鈍り、全身で重いズタ袋を引きずっているようでしかない。

ここで死ぬのだろうか。

その言葉がぐるぐると頭をまわる度に、必死で気力を奮い起こして、歩く、歩く、歩く。
ふと、気づくと境界線はなくなり、目の前が真っ白になった。

ああ、もうここまでか。

しゃがみこみ、やるせなさに思わず手を振り上げ、白い世界に拳を叩き込む。

ドカッ……ズシャッ。
あれ？

突然雪の壁に穴が開き、彼女は中の空間に頭から落ち込んだ。

模索中（前書き）

前回、案内人なしで雪山に挑んでしまったシャーロットの運命やいかに。

模索中

埋もれていた体を起こし、雪を払う。後ろを振り返ると、そこは入り口になっていて、半分ほど雪で埋もれている。

……信じられない幸運だった。

どこかの岸壁にできた洞穴であろう場所は暗く埃っぽいが、宿の一室ほどの広さがあり、さらに目を凝らせば、奥にまだ人の通れそうな穴が開いている。

「……」

うわ、と驚きの声を上げたつもりが白い息が出ただけだった。

なんと奥の穴を通り抜けた先はちゃんとした部屋になっており、不恰好ながら棚やテーブルやベッド、丸太でできた椅子まで置いてあった。片隅には薪が散らばっている。

ああ早く火をつけてこの雪まみれの上着を脱いで暖まりたい。

ラッキーなことに、ここは誰かが住んでいたとき使っていたものがそっくりそのまま残っている。

まあ衣類とかはないが、あってもどうせ虫食いでボロボロだろうから別にいい。

しばらく考えて入り口近くへ戻り、そこの雪をかいて入り口を広げ、中央にあるくぼみに薪や手作り感溢れる木製の串を並べ、隅に置いてあった石で半円を描くように囲んでから火をつける。

徐々に大きくなる火種とパチパチと火のはぜる音に、彼女はやっと強張っていた体がほぐれていくのを感じることができた。

やれやれ、と一息ついて、シャロンは上着を干してある棒の隣に置いたカバンから干し肉、小さな塩の塊を用意し、奥の部屋から埃まみれの鍋を取ってきて、綺麗にしてから雪と一緒にさっきの食料を放り込む。

くつくつと煮える音と充満する匂い。外は吹雪だが、洞穴の中は暖かだった。

備えあれば、憂いなし（前書き）

洞穴生活続行中。

備えあれば、憂いなし

シャロンは肉が煮えるまでのあいだ、もう一度カバンの中身をチェックすることにした。
水や干し肉、ドライフルーツ、それから塩の塊。
……これで一週間はいける。普段からの備えが役に立ったな。

シャロンはこういう時のためにいついかなる場合でもカバンには充分な食料を入れることにしており、事実それらに助けられたことはたびたびあった。
しかし裏を返せばそれらを使わざるを得ない状況に幾度もなった、ということでもある。

カバンをチェックし終わると、今度は腰の剣の状態を確かめる。
ガチガチに凍りついていた柄もすでに溶け、スラリと抜くことができる。
「……あ、しまった」
腰につけていたはずの鈴が、影も形もない。

この雪山には魔物が幾種か棲んでおり、魔物除けの鈴を鳴らしていれば近寄ってはこない、という町の人の話を聞いて、一つ買って結んでおいた鈴。
吹雪の中でなくしたのか、それがなくなっている。

まあ、どうにかなるだろう。

シャロンは煮えた鍋を火から降ろし、直接木製スプーンですくって肉を口にした。
薄く塩味のついたそれを平らげてから奥の部屋へ行き、薪を用意

する。

今夜は寝ずの番、か。

簡易寝台から持ってきた毛皮を巻きつけ、結局下着以外全部脱いで干すことにして、そのまま一晩中炎を絶やすことはなかった。

備えあれば、憂いなし（後書き）

ちなみに、火を絶やせば翌日までに凍死です。

吹雪のち晴れ、所により……（前書き）

主人公はまだ雪山で頑張っています

吹雪のち晴れ、所により……

翌日は嫌味なほどよく晴れた。

乾いた服を着て、洞穴の住居から外へ出てみれば、辺りは一面の銀世界。目に映るのは、空の青と雪の白と木々の濃い緑しかなかった。

カバンから地図と水を取り出し、カップに入れた水の上に磁力のある鉄片を浮かべて北の方角を確かめる。

ふもとは南西。今から行けば、日の入りには町へ着くことができる。

無事帰る目処が立ち、もうここに来ることはないだろうと、シャロンは役立ちそうなものを持って帰ることにした。

どこか不恰好な木製の棚、木彫りのカップ。昨日世話になったぼろぼろの毛皮。

残念ながらこれといってめぼしいものは……。

そう思いながらいろいろ探っていると、棚の横に妙な物体があるのに気づいた。

丁寧に埃やクモの巣を払い、布で拭うと、それは剣の握りの部分だとわかる。

部屋全体に敷かれた板の隙間から飛び出しているこの大きさからして、刀身も大きめの部類に違いない。

「ふっ、くぅ」

シャロンはその剣を隙間から抜こうと試みた。しかし、板に挟まれそのまま凍りつきでもしたのか、柄をいくら引っ張ってもびくと

もしない。

汗がにじみ、はぁ、はぁと肩で息をするぐらいまでねばったものの、しぶとくそこに留まり続ける柄。

このままでは日が暮れる。

なんとなく心残りではあるものの、これだけのために時間を無駄にはできない、と彼女は埋まった剣を諦めることにして荷物をまとめ、その洞穴を出た。

確か町の人たちの話では『雪山では狼と白ジシに気をつけろ』とのことだったが……白ジシというのはどういうものだろう、などと首をひねりつつ、ふもとを目指して晴れ空の下をザボザボと歩いていく。

積雪は深く、場所によっては肩ぐらいまで埋まってしまうため、歩いているのかかきわけているのかわからなくなってくる。

それでもしばらく行くと、やがて雪に埋まるのが膝下ぐらいになり、やっと道らしくなってきた。

針葉樹林の中に続く道は、ひたすらザクザク歩く音と、時折上の枝から落ちる雪の音だけが響いている。

ここもきっと夏ごろには材木を運ぶ人でごったがえすのだろうな、と思いつつ無心に歩いていると、

ギシ、ギシギシ。

枝が大きく軋る音が聞こえた。

……上に何かいるのか、と見上げても、雪がかぶった枝や葉があ

るばかりで変わった様子はない。

視線を道に戻すと、前方からガサ、ガサガサガサと音とともに何かが近づいて、逃げるまもなくシャロンの目の前に狼が飛び出してきた。

吹雪のち晴れ、所により……（後書き）

磁力のある鉄片→方位磁針　　シシ→獣

合流地点（前書き）

前回、狼に襲われたところより。
流血描写が多少ありますので苦手な方はご注意ください。

合流地点

狼が喉笛目がけて食らいつこうとするのをかわして剣を抜き、脇腹に切りつける。

ギャウッと悲鳴を上げた相手はすぐに立ち上がり、血を流しながらも二三歩跳び退ると遠吠えで仲間を呼んだ。

辺りを見回せば、遠くからもう一頭がこちらへ向かってくる。

……まずい。あいつが来る前に片をつけなくては。

キキィキキィッ

油断なく手負いの狼の動きを窺うシャロンの頭上より、鳴き声とギシギシ軋る音が幾重にも届いた。すぐ近くの枝には、いつのまにそこにいたのか白猿が彼女を見下ろしている。

大きさは五歳の子どもほどの、動かなければ雪と紛れてしまうだろう獣。目の前だけでなく横にも、後ろにもいる。シャロンは猿が枝を揺らしながらじっと見ているのは、自分だと気づいた。

狼に食い殺されるのを、待っているんだ。

そう意識して、背筋が凍る。その途端、対峙していた狼が動いた。同時に木の上で待ちきれなかった猿の何匹かが彼女へ飛び掛かってくる。

白猿にしがみつかれた体は重く、そこへ牙を唸らせた狼が———

「ぁあぁぁぁあっ」

シャロンは叫んだ。

ものすごい力で猿を引き剥がし、食らいつこうとした狼の口から頭へ剣を突き刺し振り払う。
雪に舞う血飛沫の中、追いすがってきたもう一頭の狼の下から心臓を一気に裂き、投げ捨てた。

「生き、てる」
息が荒い。気がつくと、白猿の群れは姿を消していた。雪で血を拭い、疲労した体で再び道を歩き続ける。

歩いて、歩いて、日が傾きかけたとき、道の先の先から希望に満ちた音、何人かが歩く足音と人の声が聞こえてきた。

「そっちは……ですよー」
「見晴らし……」

棒のようになった足を必死で声のする方へ進ませ、木々の間の茂みを何回もくぐる。
やがて視界が開け、広い道と、幾人もの人が歩いているのに出くわした。

どよめきと悲鳴が上がる。
「おい、大丈夫か！？」
現地の人と思しき男が近寄ってくる。それを聞いたシャロンの体から急速に力が抜け、その場にがっくりと倒れ込んだ。

至福の一口。

大方の町民の予想より早く吹雪は去り、静かだった町は突如として活気に満ち溢れていた。
一日ゆっくり体を休めて回復したシャロンは、夕方せっかくなので地元の酒を味わおうと酒場へ繰り出すことにした。

しかし、娯楽の少ない小さな町では、起きた出来事はあっというまに広まる。
酒場ではなるべく目立たない、細長いテーブルの隅に座ったはずだったが、どこで聞きつけたのかほとんど行き倒れ状態だった彼女の話を聞こうと、いつのまにか人が集まっていた。

「おまえさんが一昨日出発したとき、山には人がいなかったんじゃないのか？よくそれで変に思わなかったな」
「いや、人がいなくてゆっくり楽しめる、と思っ、て……」
ぶわはっは、と耐え切れず酒場の主人が笑う。
「いやいや、この辺のもんは子どもでもあの天気で山へは登らないさ。裾の方に雲が広がってたじゃないか」
「……」
よく見るとまわりの男たちも皆一様に肩を震わせたり、我慢せずテーブルに突っ伏してひぃひぃ言ってる者までいた。
シャロンは憮然としながらも、運ばれてきたライ麦酒に口をつけ、一口ごくっと流し入れる。

死にかけたせいか、苦みが体中に沁み渡るようなうまさだった。
それから徐々に混み始め、注文がうるさく飛び交う中でも一人静かに飲み続け、たかったのだが……実際にはひげ面の酔っ払いにか

らまれたり、噂を聞きつけた相手に話をせがまれたりしてにぎやかに過ごして、しばらくのち。
酒場に来る客も一段落、やっとのんびり飲める余裕が生まれ、ここぞとばかりに新しい酒を注文するシャロン。

程よく酔っ払い、饒舌になった彼女は、何度目かわからない話を新しく来た客にしていた。
常連らしい中年のその男、ディランは、雪山にも詳しいのかところどころ口を挟んでくる。
「あんたの出くわした猿だが……あいつらは本当に厄介でね。たまに討伐依頼が出るから、引き受けちゃどうだい？そこそこの金にはなるよ」
「いや、残念だが見晴らしのいい丘に寄ったらもうこの町を出ようかと思うんだ。路銀も少ないし、その依頼を待つだけの余裕がなくてね」
「そうか、残念だ。正直、面白い話になりそうだと思ったんだが……」
「どういう意味だそれは」
シャロンの抗議に笑いながらも、男は三杯目のライ麦酒を一気に飲み干す。

「しかし本当に、あれは自分でも運が良かったと思ってる。あの洞穴を見つけなければ、今頃は生きていなかった」
「洞穴の住居ねえ……どっかで聞いた気がするんだよなー。おいオヤジ！心当たりねえか」
「うーむ……雪山の外れにある洞穴、ねえ。ちょっと待ってな」
突然話を振られた酒場の主人――いや、カルヴァンだったかカルヴィンだったかそんな名前だった――はごそごそと奥の棚を探り、黄ばんだ紙の束を取り出してめくり始めた。

「おい亭主、埃が舞ってる」
手でそれを払いながらシャロンが顔をしかめると、
「悪い悪い。確かこの辺に……あ、あった。三年前、アルフレッドの依頼。そういや未解決だったな」
「だろ？あのアル坊やの依頼ですっげー驚いたんだけど、結局誰も引き受けずじまい」
盛り上がる二人についていけず、思わず口を挟む。
「何のことだ？依頼って……」
「そうだな。まずは、本人に聞いてみるといい。おーい、誰かアル坊呼んでくれないか」
「いや、待て。まだ私は引き受けるとは……」
「いいっていいって。どうせあいつ、いつも暇してるから」
おう、じゃあ呼んでくるぜと笑いながら、店内で飲んでいた筋肉質の男一人が出ていく。
「……この近くにいるのか？」
「ああ、この店からちょいと裏へ入ってすぐのところに住んでるんだ。もともと観光案内人なんだが人見知りが激しくてね」
「……人見知りが激しいんじゃ案内人は無理だろう」
「ああ。だから今はもっぱら山で獲れた獣なんかを卸して細々と生活しているらしい。よくあれで死なないもんだと皆感心してるよ」
「……」

しばらく待って連れてこられたアルフレッドは、予想に反して逆三角形のマッチョではなかったものの、髪の毛はぼさぼさで、無精ひげがひどい、どこの野生人かと思われるような容貌をしていた。

邂逅

なんというか、一気に酔いが覚めてしまった。
ディランは何も言わず、にやにやと成り行きを見守っている。
突っ込みどころはいろいろあったが、人見知りが激しい（かも知れない）相手にぶつけるのはまずそうだ。ここは一つ、無難な線でいこう。
「初めまして。私はシャーロット・リーヴァイス。その、いきなり呼び出してすまない」
と一応この黒髪の男、アルフレッドに謝罪しておく。
この町に多い茶色系の髪でなく、黒髪なのも気になるな、と思いつつ挨拶を述べた途端、長く伸びた前髪の下から青灰色の目がこちらを睨んだ。
しまった、どうやら怒っているらしい……といっても私は何もしてないんだが。
内心で冷や汗をかくシャロンを気づかい、酒場の主人が口を挟む。
「いや、こいつ普段から目つき悪いから」
「そ、そうなのか」
男は、こちらをじっと見ながら何もしゃべらない。
「えっと……あなたに少し尋ねたいことがあるんだ」
なぜ私が、と思いつつ誰も何もフォローをしないのでそう言っておく。
まわりの表情や雰囲気から、面白がって高みの見物をしているのがよくわかる。

「……」
また無言。なんでもいいから反応を返してほしい。気まずいから。
と、その祈りが通じたのか、彼はかすかに頷いた。よかった、これで話が進む。
「それで、実は……」
言いかけてシャロンは自分がほとんど何も知らないことに気づき、こちらを傍観している二人に助けを求めた。ディランが肩を震わせ笑いながら、
「アル、おまえが以前出した依頼、もう一度聞かせてくれないか？ひょっとしたら、こちらの嬢ちゃんの話に関係あるかもしれない」

真剣な表情でディランの言葉を聞いていた男は、最後の台詞でばっ、と音が出そうな速さでこちらに向きなおった。
遺憾ながらこの反応で、どうして誰も彼の依頼を引き受けなかったのかがわかった気がした。
普通なら彼の姿を見た瞬間にさようなら、だし、それをしなくとも関わるのは面倒くさそうでしかない。服装が質素すぎるため報酬が充分貰えるかどうかも怪しい。

「……依頼」
あ、初めて声を聞いた。姿から受ける印象より若く感じる。低くてわりと好みかもしれない。
「引き受けて」
「いや、だからまだ話も聞いていない！」
シャロンはちょっと待て、と額を押さえ、横でずっと肩を震わせているディランと、苦笑したままの亭主をじっとりと睨む。
「……こいつ、いったい年はいくつなんだ」
「十七だよ」

笑いすぎて腹筋の痛くなったディランの代わりに酒場の主人が答えた。

……同い年か。

いろいろな意味で戦慄を覚えた瞬間だった。

依頼と報酬と

「アル坊。ひげぐらい剃ってこい」
酒場の主人が小さなナイフを渡すと、彼は小さく頷いて奥へと入っていく。

「……案内人には向いていないんじゃないか？」
「まあ、その通りといっちゃあそれまでなんだが。あれでも、格安で引き受けるんで、一部には意外と人気があったりするんだ。服装や顔まわりを整えれば、そこそこ見られるしな……おい、ディラン。もうやめとけ」
笑い上戸状態がなかなか収まらなかったディランは、知らぬまに五杯目を空にして、テーブルに突っ伏している。
一気にまわったのか首まで赤い。

……そのうちいびきまで聞こえてきそうだ。

「で、彼が戻ってくる前にどういう依頼なのか教えてくれ。この状況で直接尋ねたら期待を持たせてしまいそうだ」
「ああ、わかった。アルフレッド坊やの依頼内容はな、『雪山にあるダン・フォスターの住居を共に探してほしい』だ。何でも、そこに養い親の形見の剣があるらしい。成功報酬は銀貨３０枚と、悪くはないんだが……広い上に、魔物がうろつくような場所を探しまわろうって無謀なのはそうはいない。また、あいつの見た目や性格も災いして、結局未解決のままだ。そこのディランも狩りのついでに挑戦してみたはいいが、二三日であっさり放棄しやがった」
「その、ダン・フォスターの住居の特徴は？」
「それが、岸壁にある洞穴を利用して作られたものらしい。おまえさんが迷い込んだっていう場所にそっくりだろ？」

洞穴の住居に、形見の剣。
シャロンの脳裏に、突き刺さったままで取り出せなかった剣のことが閃いた。
……あれか。
あそこに案内するだけで、銀貨３０枚なら悪くない。……しかし、あの時諦めなければもっと楽に大金を手にすることができたのに。
悔しさに拳に力を入れつつ、この依頼を引き受けることを決意する。
「話はわかった。それで、相談なんだが……雪山の地理や天候の変化、棲んでいる魔物の生態に詳しい奴はいるのか？」
「なんだ、受ける気になったのか？気が早いな」
酒場の主人が笑う。なんと言われようと、この幸運を逃す気はない。
「それならピッタリの奴がいる。そいつだ」
彼が指差した先には、髪はぼさぼさのままだが、ひげを剃って幾分さっぱりしたアルフレッドが歩いてきていた。
目つきと顔色は悪く、頬が若干こけているものの、ちゃんと普通の青年に見えた。

依頼と報酬と（後書き）

銀貨１枚＝約４，０００～５，０００円

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8034x/

異郷より。

2011年11月6日02時13分発行